

サウジアラビアの教育事情の研究とその考察

前リヤド日本人学校 教諭

兵庫県姫路市立高丘中学校 教諭 上 阪 浩 一

キーワード：リヤド（サウジアラビア）、現地理解、サウジアラビアの学校教育、各種学校訪問、日サ教育比較

1. はじめに

長年の夢であった在外教育施設派遣を実現させ、在サウジアラビア・リヤド日本人学校に赴任することになった。英語科教員として国際理解教育を担当した経験があったため、月に1度、サウジアラビアでの生活や異文化についてまとめた通信を発行することを決め、現地理解に取り組んだ。日本国内の国際理解教育の一助となればという思いが強かったが、それ以上に通信発行のための準備が自分自身の現地への理解を深める機会となり、意欲的・主体的にサウジアラビアについて学び、経験を深めることができた。その中でも、サウジアラビアの教育事情について調査し、日本の教育との比較・考察をした内容が印象的であるため、その概略を以下に紹介する。

2. サウジアラビアの教育事情・各種学校訪問について

(1) サウジアラビアの教育制度とその特徴

サウジアラビアの教育制度は、6・3・3・4制で実施され、小・中学校（6・3年）が義務教育にあたる。公立学校の授業料は無料である。2004年、義務教育制度が定められたことで、へき地に住む遊牧民（ベドウィン）の子どもにも教育の機会が与えられるよう補助制度が整えられ、ほとんどの子どもが就学できるようになった。サウジアラビアでは宗教上の理由から小学生以降、男女が分かれて学校生活を送る。中学校卒業後、各生徒はコースを選択し、教育省の実施する試験を経て、進学先を決定する。その試験の内容は、イスラム教とアラビア語の内容に偏っているとされており、理数教育の成果が実っていないのが実状である。大学の学部は4年が基本であるが、高校を卒業した時点において大学で学べるだけの学力が身につけていない、というのが実状であるため、専門的な学習を始める前に基本的な知識の定着を図る1年間の予備課程を設定しているところが多い。

小中学校では、前後期制が採用され、それぞれ約80日の登校日があり、年間160日程度の授業日が設けられている。前述の通りサウジアラビアの教育の特色として、イスラム教の授業が挙げられる。「イスラム法学／神学／預言者ムハンマドの言行録／コーランの解釈」と、多岐にわたる分野からイスラム教の理解を深め、信仰心を高めている。イスラム教の教えがすべての行動指針となり、イスラム法典により国家の運営も行われてきた。しかし、ここ数年、改革派のムハンマド＝ビン＝サルマン皇太子主導の脱石油の経済政策“サウジビジョン2030”で新しい改革が次々に打ち出され、サウジアラビアは変革の時期を迎えている。

(2) 小中高一貫私立校“Al Rowad International School”への訪問

① 学校概要及び特色

男女それぞれの部門を合わせると在籍は5000人（ほとんどがサウジ人）を超える。25人学級のもと、多くの近隣国出身の外国人教員によって授業が展開される国内成績上位校である。この学校では小学校1年次から英語教育を実施している。英語の授業は

	日	月	火	水	木
6:30-6:45	朝礼				
1 6:45-7:25	数学	宗教	アラビア語	宗教	宗教
2 7:25-8:05	宗教	アラビア語	数学	宗教	数学
3 8:05-8:45	宗教	宗教	英語	数学	アラビア語
8:45-9:15	休憩(軽食)				
4 9:15-9:55	宗教	英語	アラビア語	アラビア語	英語
5 9:55-10:35	理科	アラビア語	英語	体育	アラビア語
6 10:35-11:15	英語	英語	体育	社会	英語
7 11:15-11:55	社会	数学	宗教	英語	美術
11:55-12:05	お祈り				
8 12:05-12:45	アラビア語	宗教	コンピューター	理科	美術

男子学生の時間割（小・中学校）

外国人教員によって英語で行われている。見学した小4クラスでは、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）機器や単語のフラッシュカードを活用して語彙力を深める活動を中心に行っていた。語彙を増やし、音声として発することが中心で英語を話せる人材の育成につなげようとしている。

② イスラム教の授業

この学校では、イスラム教授業の多いコースと通常の授業数のコースの2種類がある。イスラム教授業数の多い専門コースでは週40コマのうちの14コマがそれに充てられ、通常コースでは週10コマがそれに充てられる。コーランの暗唱・解釈の授業を見学した。教員がコーランを範読すると、児童は教師の範読を手元のコーランを指でなぞりながら確認し、その後児童がコーランを音読する。教員は読み方だけでなく、コーランの内容やその背景なども説明しながら読み進めていく。何度も繰り返し学習し、児童生徒はコーランへの理解を深めていた。



コーランの授業の様子

③ AI Rowad International Schoolの教員研修

教員の指導力向上のため、教員研修を実施している。全教員での研修や各教科担当の研修、学期ごとに狙いをもった研修を設定したり、他校への授業見学に出かけたりすることもある。月に1度、教員は自身の取り組みの振り返りシートを記入し、管理職はそれを含めて教員評価を行っている。評価の良かった教員は写真が貼り出され、特別ボーナスが支給されることになっており、教員の動機付けになっている。

(3) 高卒生以上を対象とした職業専門学校“SEHAI”への訪問

① 学校概要及び特色

SEHAI（Saudi Electronics & Home Appliances Institute / サウジアラビア電子機器・家電製品研修所）とは、日本政府・日本ワーキンググループ（JWG）とサウジアラビア政府・サウジアラビアワーキンググループ（SWG）の協力によって設立された。学生は入学と同時に就職先を決定し、その企業から給与をもらいながら学んでいる。知識をOJT（On the Job Training）で実際に運用させ、卒業後、各企業で活躍できる人材を育成している。

② 教育の特色

授業は全て英語で行われる。マニュアルの読解や、PC操作能力の習得、外国人技術者との英語でのコミュニケーションが重要となるためである。電気技術の習得だけでなく、英語学習が全カリキュラムの25%を占めている。

“Monodukuri（物作り）”という名前の授業があり、そこでは作業の5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）が教えられている。これからもわかるように、日本人がカリキュラム編成に携わり、日本人が良いと考えることを学生たちに伝えようとする機会が確保されている。しかしながら、それが一方的な押し付けになると反発も大きく、意図が伝わらないということが頻発したとのことであった。現地に適用するよう形を変えながら、その目的を達成できるよう取り組みに工夫がなされている。

(4) 国立大学“King Saud University”への訪問

① 学校概要及び特色

キングサウド大学は首都リヤド市内にあり、サウジアラビアの国内最古にして最大の総合大学である。1957年、文学部の創設をもって創立され、その翌年に理学部、その後、さまざまな学部の創設が続き、理論系や応用系のあらゆる専攻学科を含むサウジ最大の大学が形成された。Times Higher Educationの大学ランキングでは、アラブの大学中でトップの座を獲得するなど、サウジアラビアの高等教育を牽引する存在で、国を支える多く

の人材を輩出している。

② College of Language and Translation Department of Modern Language Japanese Program (言語翻訳学部 近代言語学科日本語専攻) について

日本のゲーム・アニメ文化の影響で、日本語を学びたいと考えるサウジ人は一定数いるものの、日本語を学習できるのは、国内ではこの専攻しか無い。2017年現在、2名の日本人を含む5名の教員によって運営されている。筆記(書き方)、文法指導、文化比較、日本語表現、翻訳、通訳などの授業が開設され、卒業課題として日本語文章のアラビア語翻訳に取り組む。通常の授業において、日本人教員は、日本語・英語・アラビア語で説明をしながら、丁寧な机間巡視を行う。サウジアラビアでは机間巡視という考え方はあまり浸透していないそうだが、日本人教員は十分な机間巡視を行うことで、学生への細かな指導はもちろん、受容の態度を伝えることで学習への動機を高めようとしている。

3. 現地の方との交流

(1) キングサウド大学 言語翻訳学部近代言語学科日本語専攻の学生とリヤド日本人学校児童生徒との交流

日本語を学ぶ学生たちは、学んだ日本語を実践的に利用する機会が少ないという悩みを抱えているため、年に1度リヤド日本人学校との交流会を実施している。日本語を通して、リヤド日本人学校児童生徒は日本の伝統的な遊びの紹介をして共に体験をし、キングサウド大学学生が民族衣装の着方を紹介して、リヤド日本人学校児童生徒に着用させるなど、互いの文化を体験し合う良い機会となっている。

(2) キングサウド大学 言語翻訳学部近代言語学科日本語専攻の学生を対象にした日本文化の紹介

遊び体験を通して日本の文化を知るリヤド日本人学校児童生徒との交流会とは別に、私が日本の文化を紹介する機会をいただき、学生と交流することができた。日本の四季、電化製品や自動車といった工業製品の話からゲーム・アニメの話へと展開していった。日本のゲームやアニメがきっかけで日本語を学ぶことになった学生が多く、サウジアラビアの若者への影響力を実感することができた。日本の文化について意見を交流させたのち、こちら側からサウジアラビアの若者・大学生の生活の実態についていくつか質問をし、学生たちの意見を直接聞くことができた。将来の夢が無い、未定であるという学生が多く、先を見越した行動という考えはあまり浸透していないようである。裕福な学生が多く、ただただ目の前にあることをこなし、日々を過ごしているという印象であった。

(3) 新設校教員を対象とした日本の教育の紹介

SEHAI、キングサウド大学では、日本人教員の創意工夫が至る所でなされている。日本では当たり前の“きめ細やかな指導”がこちらでも大きな成果をあげている。サウジアラビアの“改善(ハワーテル)”という人気番組の中で、日本の学校教育が取り扱われた。集団行動や、児童生徒による給食の配膳・後片付け、掃除の様子が紹介され、日本人の行儀の良さはこのような日々の積み重ねの成果であると国内で大きな反響があった。

新設校開設を担当する教育関係者から、日本の教育の詳細について話をしてほしいという依頼を受け、新設校教員を対象に日本の教育を紹介する機会を得た。学校という場所は、児童生徒にとって、学力を身につける場であると同時に、社会性を養う場でもあるということを確認し、“Respect(尊重)、Politeness(丁寧)、Cooperation(協力)”という3つの要素が日本の教育では重要視されているということを紹介した。

好評を得たのが掃除の実演であった。サウジアラビアでは各施設に専門の清掃員がいるのが当たり前で、自分たちで掃除をしなければならない場面は無い。しかし、子どもたちの居場所である学校を自分たちの手で清潔に保つことがより良い教育活動につながるという考えは共感してくれる。デモンストレーションで、紅茶の茶葉を床にまいてから清掃を開始し、茶葉の防臭効果や掃き掃除の目印に利用しているといった掃除のやり方と同時に日本の掃除文化も紹介した。その後、教員たちが教員役・子ども役に分かれ、教室清掃の実演に取り組んだ。手

持無沙汰な状態を減らすためにどう作業を振り分けるのが有効であるかを考えながら実演に取り組んだ。教員の指示の出し方で、子どもの動きやすさが変わってくることも実感できたようであった。

男女別学となるため交流する教員も男性ばかりであったが、ここでは女性教員と意見を交流させることができ、貴重な機会となった。さまざまな国から来た教員が、意欲的に日本の教育について興味関心を示してくれることで、日本の教育の質の高さを世界で認められていることを実感することができた。質疑応答で、多かったのが保護者との付き合い方。保護者のクレームにどう対応すべきかという質問が大部分で、この問題は万国共通であることを知ることもできた。

4. 考察・まとめ

資源の乏しい日本では、国を発展させるため人々は“勤勉”であることを求められた。一方、サウジアラビアは石油の発見に伴って急速に豊かになった国である。我々から見ると、サウジの人々は、「資源を無駄使いすることになったとしても今の生活を維持するためなら仕方がない。自分のテリトリーが汚れていれば、清掃員にきれいにさせればよい。計算の仕方を覚えるよりも計算機の使い方を覚えればよい」というような具合に、その場が良ければよい、と考えているように感じることもある。

これまで訪問してきた学校でも共通して挙げられた課題があった。それは、「課題に取り組まない学生（児童生徒）が多い」という点である。自己学習をしないので、学校の授業の中で基礎となる知識や課題を指導する必要が出てくる。そうすると、本来教えるべき内容に到達できない。無理をして本来の指導内容を優先すると内容を理解できない者が多く出てきてしまい、結局本来教えるべき内容に到達できない、というジレンマを抱える教員が多くいた。宗教上の善い行いをしていけばまた生まれ変わることができるという死生観の影響か“将来に備え、しんどいことやつらいことに取り組む”ことよりも“宗教上の善い取り組み”を優先する部分がある。これまで勤勉であると思われてきた日本人も、価値観の多様性や将来への不安から、これまでの美德とされていたような常識や行動に対して疑問を持つ人が多くなっている。理由は異なるが、“将来に備え、しんどいことやつらいことに取り組む”、という積極性に欠けるという同様の課題に直面している。

日本人は将来に対して悲観的で、どこか窮屈そうに生活をしている。それに比べ、サウジの人々は、実に大らかで今を楽しんで生き、宗教という精神的な支えがあることから将来を楽観的に考えることができています。あるサウジ人によると、自分の自我（アイデンティティ）は、「自分がムスリムであること、サウジアラビア人であること、アラブ諸国のリーダーであること」であると話してくれた。日本人のアイデンティティはどのようなものであるだろうか。世界で活躍するような日本人のニュースを見聞きすると、「日本人であること」に誇りを感じる一方、異文化を感じる機会がほとんど無い国内においては、「日本人であること」を自覚する機会が少ない。

日本人は、新しい価値観を認めると、古い価値観を否定してしまうところがある。しかし、時代とともに変化するもの（変化すべき）と同時に、時代が変わっても変化しないもの（変化させてはいけないもの）がある。日本人の長所をサウジ人に伝えていくと同時に、日本人はサウジ人の長所を見習わなければならない部分がある。長所を適切に伝えあうためには、それぞれの場所に適した様式に変形させ、伝え方を工夫することが大切である。日本人も、サウジ人も、異文化への理解を示し、それを受け入れる素地を耕している最中である。我々のように海外で生活した日本人や、留学生や外国語を学ぶサウジ人学生など、異文化に触れてきた人間が中心となって、異文化・多文化共生を実現する取り組みの実践が求められる。今後は、世界がますます身近なものになっていく。そのようなグローバル社会においては、主体的に物事に取り組み、知識や経験を蓄積しながら、既成概念にとらわれず柔軟な思考をすることが求められる。日本人がこれまで大切にしてきた“みんな一緒”というだけでは通用しなくなる社会において、多様な価値観をお互いに認め合いつつ生活し、個々の幸せを実現していくことが大切である。今後、各国・各コミュニティにおける教育の重要性が益々高まっていくことは間違いない。



キング Saud 大学学生との交流会後の集合写真